

# KADENA SKOSHI

MAY 2011

Vol. 32

第18航空団広報局発行



## 2011アメリカフェスト、7月2日に開催決定！

嘉手納基地を基地内住民・日本国民に開放

第18航空団広報局

2011年7月2日にアメリカフェストを開催することが決定しました。

アメリカフェストは、地元住民と嘉手納基地に駐留・居住する米国民との間における友好と理解を促進するため企画された行事です。米軍を代表する航空機の地上展示をはじめ、空軍はもとより姉妹軍隊員との交流、音楽演奏を聴き、様々な種類の食べ物を楽しんでいただけます。

「地元の日本人の友人達と嘉手納基地の周辺隣人を、来る7月2日にお迎えすることを大変楽しみにしています」と、第18航空団司令官のケネス・ウィルズバック准将は述べました。「2011アメリカフェストは、米国の独立記念日を祝福し、カデナチームと沖縄県民の友好を深める良い機会となっています」。

他国出身の見学希望者（日本国籍保持者以外の方々）の基地内への立ち入りの詳細に関しては、第18憲兵中隊パス 身分証明課の電話番号098-961-3437またはメールアドレス18SFS.pass.registration@kadena.af.milまでお問い合わせ下さい。

バックパック（リュックサック）、横断幕、標識、缶、ガラス瓶、クーラーボックス、アルコール飲料、300ミリ以上レンズのカメラ、麻薬類、火器類、ナイフ、爆発物、または武器類とみなされるいかなる物品 装備も、アメリカフェスト会場への持ち込みは禁止されています。（注釈：オムツ用バッグと小財布は持ち込み可）。

\*一般の方の当日(7月2日)の立ち入りゲートや時間帯等につきましては、詳細が決定次第、ウェブサイトでお知らせします。

## 那覇ハーリー競漕

第18航空団広報局

第37回那覇ハーリーの一般競漕が5月5日に那覇新港にて開催され、空軍チームはチーム名「ショーグン」として本年も男子 女子チームが参加しました。今回は、コーチはジャネット・エスピリトゥ1等軍曹が中心に務め、2月上旬より練習を開始。毎週火曜日、木曜日、土曜日の3回に集合し各1時間の練習を嘉手納基地内のプールで行いました。オールの持ち方、鐘の音を聞きながら漕ぎ手が同時にオールで漕ぐテクニック、そしていかに手を長く伸ばしてオールを水中深く入れ込むのかなどを練習しました。チームの年齢層は18歳～45歳。

那覇ハーリー当日、地元と米軍チーム合わせて51チームが参加。沖縄地方は梅雨に入ったばかりで、雨が降りしきる中での熱き競漕となりました。予選レースで、ショーグン女子チームは、Aグループ42チームの中にエントリー。「JTA」と「東恩納組」の地元チームと競漕し3位でゴール。一方、ショーグン男子チームは、Bグループ8チームの中にエントリー。陸軍男子チームの「トリーナイト」と地元チームの「桜梅桃李」と競漕し、1位でゴールインしトロフィをゲットしましたが、Bグループ内の他チームよりタイムで上回ることが出来ず決勝進出にはなりませんでした。ちなみに米軍（海兵隊、空軍、陸軍、海軍）内での各軍男子 女子チームの成績は、男子・女子チームとも1位海軍、2位海兵隊、3位空軍、4位陸軍という結果に終わりました。エスピリトゥ1等軍曹は、「地元の皆さんと交流するため参加でききたことが嬉しい。参加希望者が多くて、特に男子チームの漕ぎ手を当日決めることが大変でした」と述べました。



(写真全て、米空軍：ジョナサン・ステファン二等軍曹撮影)

## CONTENTS

アメリカフェストのご案内・那覇ハーリー競漕

第18航空団司令官「Sweet Sunday」で空軍兵や従業員と交流を深める

シンディ先生

SpotLight-基地で働く日本人従業員の紹介

第18兵站即応中隊、残波岬公園を清掃

スケートボード使用に関する注意喚起



## 第18航空団司令官「Sweet Sunday」で空軍兵や従業員と交流を深める

第18航空団広報局



(写真全て、米空軍：メイソン・エレメン上等兵撮影)

第18航空団司令官ケン・ウィルズバック准将とシンディ夫人が嘉手納基地へ着任して2年間、ずっと行ってきた「スイート・サンデー」が離任と共に終わろうとしています。「スイート・サンデー」とは、ウィルズバック准将夫妻が、第18航空団に配属されている空軍兵、その配偶者、軍属、そして日本人従業員を毎週日曜日（サンデー）に自宅へ約30名ほど招待し、シンディ夫人の手作りお菓子（スイーツ）でもてなし、交流するイベントです。階級に関係なく、カジュアルな私服で集まり、普段はめったに会話をする機会のない司令官夫妻とゆっくり話すことができる一時です。「彼らを自宅に招待し、日々の任務や業務に感謝するために、この機会を作りました」と話すのはウィルズバック准将。

実は1990年半ば、ウィルズバック准将が当時少佐の頃、シンディ夫人と共にこの嘉手納基地に住んでいました。当時司令官がどこに住んでいるのか、どういう人柄なのかを知る機会がなかったため残念に思ったことを思いだし、嘉手納基地に航空団司令官として戻ってきた2年前、このような『茶話会』をもつことを決めたそうです。シンディ夫人は「この官舎は1950年代から代々第18航空団司令官の家族が住んでおり、今まで米軍高官や政府関係者など多くの方々が招かれた場所です。嘉手納基地で働く軍人、その家族、軍属、日本人従業員こそがこの基地を運用しており、彼らを同じように招いて交流を深めるべきだと思ったからです」とお互いを知ることの大切さを強調しました。航空機装備要員として働くライアン・ベネット上等兵は“ゲスト”的一人として招かれた際、「ウィルズバック准将は、一人一人に話しかけ、僕は今まで知ることのなかった司令官の色々な側面を見ることができました。基地全体の部隊、また隊員の事をとても大切にする司令官だと感じると同時に、基地幹部がこの様なイベントを主催するということは、とても意義深いと思います」と感想を述べました。

「各司令官や監督者は、仕事以外の私的な時間に部下や従業員、またその家族と一緒に話をする機会を持つことが大切だと思っています。各個人の人間性を知ることによって、彼らの米国に対する貢献をさらに理解し感謝することができるためです」とウィルズバック准将は、人の繋がりが大切だと話しました。嘉手納基地にはおよそ30に及ぶ中隊や事務所があり、過去2カ年の沖縄滞在中シンディ夫人が週末に焼き上げたクッキーは数千枚に及ぶそうです。



Sweet Sunday!

## シンディ先生

(嘉手納基地将校配偶者の会の会員宛の便りから抜粋・略文)

もうすぐ沖縄を離れ本国へ帰る日が近づいています。なつかしい「第2のふるさと沖縄」へ戻り、あつという間の2年が過ぎようとしています。私だけでなく転勤を繰り返す軍人の家族は皆同じ気持ちだと思いますが、軍人家庭の遊牧民的生活は新しい土地への冒険に期待を膨らませると当時に住み慣れた場所への愛着が混在するセンチメンタルな心境になるものです。

私はこの2年間、多くの友人や嘉手納基地将校 下士官配偶者クラブの仲間と共にたくさん行事に参加し、友情を暖め、素晴らしい時を共有することができ感謝しています。それから今回の「旅」でもう一つ大切な出会いがありました。



1994年、夫の転勤で初めて嘉手納基地で生活しました。その頃、私は沖縄の女子高生2人に週に2度、自宅で英会話を教えていました。彼女達は私を「シンディ先生」と呼んでいました。その後転勤で沖縄を離れ、高校生たちとは数年間は書簡のやりとりもありましたが、転勤を繰り返すなかでいつしか音信が途絶えてしまいました。その後、再度沖縄転勤が決まり、2009年7月に沖縄に住むようになってからいつかその高校生たちに会いたいものだと思っていましたが、日々の忙しさに追われ気がつくと1年も時が過ぎていました。ある日、基地内の友人（日本人従業員）に相談してみました。氏名以外手がかりがないと思っていたら、ラッキーなことに日本からの葉書がてきて、「この住所に女子高生がまだ住んでいるかしら？」と、葉書を見せるとな、友人が早速連絡をとつてみるとのことになりました。

今年2月のある日曜日、あの子達が私の家を訪ねて来てくれました！二人が訪ねて来た日、私は高校生がブラインドデートをする時のように高揚した気分で再会を待っていました。玄関に近づいてくる足音を聞き、急いでドアを開けると、濃紺の制服を着ていた女の子たちは、スタイルリッシュな衣服に身をつつみ、ほんのり頬紅や口紅をさしたさわやかな女性になって私の目に飛び込んできました。16年の時が流れ、恥ずかしがりやで、何かにつけてクスクス笑いをしていた二人は、30代半ばのそれは素敵な女性に成長していました。「シンディ先生！」と呼びかける懐かしい声、再会の喜びで目頭が熱くなってしまいました。日本の人々は大げさに感情を表さないことは知っていますが、そのときの私たちは再会がうれしくてしっかり抱き合ったのです。

英会話の練習や、何度も夕食をとったこと、一緒に料理をしたことが私たちの「接点」ではなく、私たちの間には純粋で、気取りのない、心からの信頼関係が築かれていきました。時を経て、会った瞬間に心がそれを思い出しました。お互いの人生のある時を共有し、たとえ何年も会わなくても離れていても私たちの築いた信頼関係を消し去ることはできないことを実感しました。

その日曜日の午後、サトコさん、シマコさんと私たち夫婦は思い出を語り、私たちを再びつなぎ合わせる時間を持つことができました。豊かな気持ちで満たされた午後でした。



忙しい日々の生活のなかで、人々との関わりがありがあり、それは自分を含め周りの人々にもなんらかの影響を与えあっています。だからこそ、私の経験からですが、（軍人配偶者の）皆さんには楽しいイベントを企画したり楽しむとともに、どうか「人々との出会い」に投資してほしいと思います。そして、その出会いを通して私の人生に素晴らしい影響を与えてくれた全ての方々に感謝します。

シンディ・ウィルズバック著

# !!! 今月の SpotLIGHT

嘉手納基地で働く様々な職種の日本人従業員にスポットをあてて紹介していくコーナーです。今回はこの方にお話をうかがいました。

第18部隊支援中隊 カデナ・アーツ＆クラフト  
プログラムコーディネーター 喜友名 令佳さん



## Q1. あなたの職種と仕事内容をお聞かせ下さい。

プログラムコーディネーターです。アーツ＆クラフト（手工芸品）センターで行われている講座・教室や催し物の調整をしています。

このセンターで実施されている講座 教室は様々で子供から大人まで参加できます。講座予定表の管理、講座で教えている25人の米国人講師の雇用契約手続き、講師勤務管理、新人講師に対する教育も担当しています。私自身講師として子供達に手芸・工芸を教えています。

18 FSS

年間5~6回の大きな行事を主催していく、最近のイベントでは子供達があよそ100人参加したイースターのエッグハントを開催したり、嘉手納基地内の下士官や将校の配偶者の会がグループ活動の一環として私達の手芸教室を団体で受けることもあります、どんな講座を利用したら良いかなど提案や調整をします。週末には子供達の誕生日パーティーも行っていて、誕生会に集まつた子供たちに紙粘土工作やミニ日本庭園作り、今一番人気のこけしのペインティングなどで楽しんでもらっています。

新しい講座を企画し実際に開講できた例もあります。私がここで働き始めた頃は子供向けの講座・教室はありませんでしたが、私の提案で青少年のための講座が開講されました。9歳から参加できる裁縫教室、これはミシンの使い方から教える初步クラスですが、最終的には自分の服を作る本格的な裁縫教室もあります。また、先ほどお話しした、こけしの色づけは7歳から大人まで参加できる講座なので、家族と一緒に参加できるという利点もあり人気があります。

その他、第18任務支援中隊のウェブサイトにあるアーツ＆クラフトセンターのホームページにも携わっていて、講座や催し物の予定表を更新したり、ホームページを通した申込者への対応なども行っています。

SpotLIGHT!  
SpotLIGHT!



Q2. 職場のスタッフ構成は？ 米国人従業員28人と日本人従業員7人です。

Q3. この職場に勤めてどのくらいですか？ 16年目です。

Q4. どういう点に仕事のやりがいがありますか？

子供達に教えることがとても好きなので、子供達に教えたときに喜んでもらえることがとても嬉しいです。また、催し物や誕生日会などで家族が充実したひとときを一緒に過ごす機会を創るお手伝いができることにやりがいを感じています。特に日ごろ忙しい父親が子供達と一緒に工作をして楽しんでいる姿や、それを見守る母親の様子など、私のほうも嬉しくなります。また、私達の教室で習って手作りした和紙クラフトを本国の両親に送って喜ばれたと嬉しそうに伝えてくれたときなど、人が喜んでくれている姿を見ると幸せな気持ちになります。

Q5. この仕事の大変さについて。 Arts & Crafts Center

プログラムコーディネーターは私一人なので、人手が不足しているということです。もっと色々なイベントを計画、実行したいのですが、一人でできることにはやはり限りがあります。もちろんボランティアの方々の助けを借りたりもしますが、一緒にコーディネイトができる人が欲しいです。人員が増えればこのセンターの使命である嘉手納基地のコミュニティーを支援するという意味でも、私達の活動をもっと紹介し、参加者を増やすことができるのではないかと思います。また、ほとんどの講師が2年から3年で転勤してしまうので、その度に新しい講師を探して、講座・教室運営の方法を教えなければならないことです。



## Q6. アメリカ人と働く環境での一番の課題は何ですか？

お客様として対応する米国人はおもに軍人、軍属、配偶者、子供達ですが、皆さん優しくて良い方たちです。お世話した米国人から焼き菓子などの差し入れを頂いたりして、良い関係を築いています。

## Q7. 同じような職種に就こうと考えている方へのアドバイスは？

仕事に対する熱心さ、これが一番大切だと思います。誰でも初めは何もわからい状態で始めると思いますが、熱心さがあれば仕事に関わる様々なことを吸収してやっていけると思います。

(写真全て、米空軍：ラキーシャ・クローリー二等軍曹撮影)

!!! 今月の SpotLIGHT

## 第18兵站即応中隊、残波岬公園を清掃

第18航空団広報局

4月21日、第18兵站即応中隊からあよそ100人の航空兵と日本人従業員が、ボランティア活動の一環として読谷村の残波岬公園を清掃しました。ビーチ側、灯台付近、散策用歩道を歩きながらゴミを拾い、ゴミ袋50枚分の瓶、空き缶、その他ごみを集めました。

同中隊の隊員らは個人的にも地域社会と関わりを持つよう、これまでも積極的に地元地域におけるボランティア活動に関わっています。「快適に生活できるよう、沖縄をきれいな場所にするため同僚達と一緒に清掃活動に参加し、またそのような日本の社会にいることが嬉しいです」と、ダリス・ワット1等軍曹は話しました。職場とは異なる環境で、地元地域で清掃活動を行うという時間の共有は、日本人従業員と航空兵がチームワークを高め親密な協力関係を築くことにも役立っているようです。

これまで数回にわたり伊江島の老人施設を訪問したり、基地内外の清掃作業を行ったりしたボランティア活動が認められ、同中隊は昨年度、日本善行会の春季善行表彰を受賞し、本年度の春季善行表彰の受賞も決定しています。



18 LRS' VOLUNTEERS @ CAPE ZANPA BEACH PARK

# SUNABE BABA PARK SAFETY CONCERN

## スケートボード使用に関する注意喚起

第18航空団広報局



北谷町砂辺にある馬場公園は、近隣住民や子供達の憩いの場として、日々多くの人が訪れ賑わっています。馬場公園には遊具やスケートボード広場、バスケットコート等があり、多くの子供達に利用されていますが、砂辺区の住民から子供達の安全面に関する懸念が寄せられました。

砂辺区自治会の松田正二会長は「米国人の子供達にも人気の高いスケートボード広場は、この地域の子供達が安全に遊ぶことができるよう作られました。ですが公園周辺の狭い道路で、公園に行き来するまでの間をスケートボードに乗る米国人の子供達も多く、交通事故が起きないかと懸念しています。」馬場公園周辺の道路は、住宅街が連なり道も狭いうえに交通量も多いため、道路でのスケートボードを使用したり遊んだりすることは危険であり注意喚起が必要と話しています。

第18航空団安全局のローリー・ベラミー地上安全課課長は「親から子供へ、しっかりと安全規定を理解させ教える必要があります。道路でのスケートボード使用は大変危険であり、子供を持つ親や私達は、日頃から子供達へ安全に対する考え方を教え、常に子供達に注意を呼びかけることが大切です」と安全を促しています。



(写真全て、米空軍：サラ・シュリラ兵長撮影)